

TOPIC

「アスタチン」を用いたがん治療薬候補 「アスタチン MABG」の安定的製造および治験の開始

本学先端臨床研究センターは、世界で初めて、アルファ線放出核種(放射性物質)の「アスタチン」を低分子の有機化合物に結合させて開発したがん治療薬の候補である「アスタチン MABG」を、人体に投与できる品質で安定的に製造することが可能となっております。

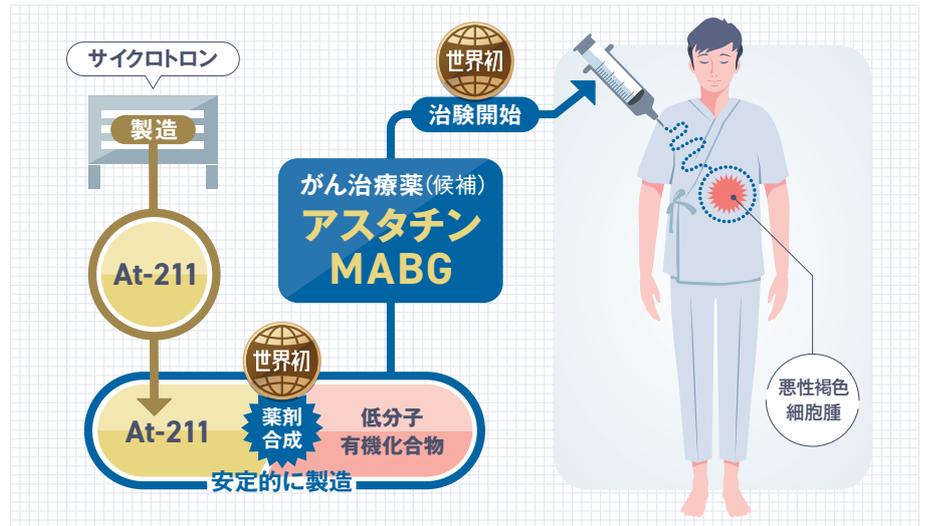
「アスタチン MABG」は、主に副腎にできる「悪性褐色細胞腫」を標的としてその治療効果を高めることが期待されています。

国内唯一の医療用のRI製造用 中型サイクロトロンで製造

この「アスタチン MABG」は、本学が所有する国内で唯一の医療用のRI製造用中型サイクロトロンにて製造したアスタチンと悪性褐色細胞腫に集まる性質のある有機化合物を結合させたもので、アスタチンが放つアルファ線によってがん細胞を選択的に死滅させる仕組みです。

世界初の治験へ

アルファ線は数十マイクロメートル(1マイクロメートル=千分の1ミリメートル)しか飛ばないため、正常な細胞に与える影響が少ない



という特徴があります。このアスタチンの利点から、特殊な病室も必要なく、患者さんの負担軽減が期待されます。また、アスタチンの半減期は約7時間にとどまります。

現在進めている治験で安全性や効果を検証してまいります。

福島国際研究教育機構 基本構想

本学では、放射性核種「アスタチン」を用いた様々な治療薬の開発研究を進めています。

そして、このアスタチンを用いた医薬品の研究と開発を通じて、政府の福島国際研究教育機構基本構想の5つの重点分野のうち、第4の「放射線科学・創薬医療分野」について、本学先端臨床研究センターを中心に本格的に参画してまいりたいと考えています。

※悪性褐色細胞腫は、動悸や重度の頭痛、高血圧、脳出血などをきたす進行性の病気で、国内では約300人の患者がいるとされています。

先端臨床
研究センターは
こちらから



令和4年8月25日 プレス発表

新型コロナウイルスワクチン 接種後の5~11歳の小児の副反応について調査結果発表

本学医学部放射線健康管理学講座坪倉正治主任教授、小橋友理江博士課程講座研究員ら研究グループとひらた中央病院は、令和4年8月25日(木)、新型コロナウイルスワクチンを接種した5~11歳の小児の副反応を調査

した結果をオンライン会見で発表しました。

調査の結果、発熱やだるさなど全身に副反応があった人は全体の12%以下で、成人の副反応の発生割合と比較して、頻度が少ないことが判明しました。研究結果が「ワクチン接種を前向

きに考える材料になれば」と期待しています。

詳細は
こちらから



大学院看護学研究科博士前期課程助産師コース(仮称) 募集にあたって 寄稿

大学院で助産師を養成する大きな意義は、2年間をかけた高度専門職としての助産師教育と学位(助産学修士)の取得にあります。

平成24年、国際助産師連盟(ICM)は「専門職としての助産師教育のためのモデルカリキュラム」を定め、教育の必要年数として「医療専門職資格取得後の課程期間は18か月またはそれ以上」の実現を提案しました。

それを受けて、平成27年、日本では全国助産師教育協議会が「助産師の教育期間は、看護基礎教育の基盤の上に2年間」とするビジョン(法的強制力はない)を掲げています。

助産師ケアは人の一生を通して 切れ目無い支援が必要

助産師教育は、助産師の業務独占である「正常経過における助産」を中核に据えています。しかし、例えば妊産婦は出産に至るまでに妊娠期があり、その後の産褥・育児期があります。更にいえば、妊娠前の思春期、その前の幼児期から育児期を終了した後の老年期まで、助産ケアの対象は、幅広い世代に及びます。つまり、「生命の誕生」には、人の一生を通し

大学院看護学研究科 博士前期課程助産師コース(仮称)

✓ 国公立大学で東北初となる助産師
国家試験受験資格が取得できる大学院

✓ 2年間で助産学に関する研究能力と
助産師としての卓越した能力を養う

●学位の授与：修士(助産学)(予定)

●募集人員5名(学内推薦選抜若干名を含む)

て切れ目の無い支援が必要なのです。そのため、2年間をかけた高度専門職としての助産師教育が大きな意味を持ちます。

また、助産師が専門職として自律するために重要なのが研究です。研究は、助産学を学問として支えます。助産実践の中から課題をみつけ探求し、その結果をエビデンスとして実践に反映する、この一連の相互作用が研究の意義です。

大学院助産師コースでは、助産学を深く学び、一つのテーマを設定しそれを探究する、その結果として学位(助産学修士)と助産師国家試験受験資格が取得できます。

広い視野を持って 生命の誕生に携わる助産師に期待

医療が発達したといえども母親への負担

は大きく、世界では出産で命を落とす人たちも少なくありません。当たり前のような生命の誕生、しかし、実は命の現場では“無事に産まれる”ことは奇跡なのです。専門職としての助産師を待っている国や地域が世界には、まだまだ沢山あります。

その期待に応えるべく、大学院で助産学を学び、広い視野を持って生命の誕生に携わる助産師が増えることを願っています。

助産師養成課程設置準備室長 太田操教授

大学院看護学研究科 博士前期課程 募集要項

詳細は
こちらから



夏の学校奥会津、夏の学校ふたば



在宅医療体験風景

本学総合診療医センターは、本学医学部生を対象に、令和4年7月21日(木)・22日(金)の2日間、福島県大沼郡三島町で総合診療医と一緒に学ぶ「夏の学校奥会津」を開催し、3名の参加者は、奥会津在宅医療センター、福島県立宮下病院、金山町国保診療所において実際の在宅医療や外来診療を見学・体験しました。

同じく、令和4年8月9日(火)、福島県双葉郡で「夏の学校ふたば」を開催し、2名の参加者が

大熊町診療所、ふたば医療センター附属病院において実際の在宅医療や外来診療を見学・体験しました。

医療資源の少ない地域での医療や総合診療に関心の高い医学部生へ、現場での体験の機会を提供することで、より興味関心を高めて将来の進路選択につなげてもらうことを目的としており、参加者は、総合診療医が果たす役割や、医療過疎地への貢献について、学びを深めました。

令和3年度医学部優秀教員表彰式を開催

令和4年8月3日(水)に「令和3年度医学部優秀教員表彰式」を開催しました。

本学教員の意欲向上と大学教育の活性化を目的に実施しており、式典には竹之下誠一理事長兼学長が出席、鈴木弘行教育・研究担当理事、藤森敬也医学部長が陪席しました。

第1学年部門は自然科学講座(分子細胞生

物学分野)五十嵐城太郎准教授、第2学年部門は、解剖・組織学講座植村武文准教授、第3学年部門は、脳神経内科学講座松田希学内講師、BSL部門は、会津医療センター漢方医学講座三瀬忠道教授に、それぞれ表彰状と楯が授与されました。

竹之下誠一理事長兼学長が「チャレンジを繰り返



竹之下誠一理事長兼学長(前列中央)と式典出席者

返し活躍してほしい」と激励の言葉を述べました。